

鯉ハゴモジ○申如此異名ヲ被付、近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々。

〔大草殿より相傳之聞書〕一。きんぎよとは、口のきなる鯉の事にて候、

〔貞丈雜記六食〕一金魚を料理に用る事、舊記にあり、金魚とは今時池に放して弄ぶ赤き魚の金色に、ひかるをいふにはあらず、大草殿相傳聞書に云、金魚とは口の黄なる鯉の事にて候とあり、土佐國にも口の黄なる鯉ありて、それを金魚といふ由、土佐人の物語也、

〔物類稱呼二飲食〕鯉こい、武藏國にて鯉魚の小なるをぶん玄ろと稱す、

〔浪花雑誌街迺尊一鶴人○申所替れば品かはるとか申やすが、品もかはらずに、名のかはるのが大分ムリやす、○申鯉をうろこ

〔本朝食鑑七河湖有鱗〕鯉

集解古曰、鯉最爲魚之主、故後人爲諸魚之長、是能神變躍登禹門之故乎、其脊鱗一道從頭至尾、無大小三十六鱗、予必平野嘗試之、兩鬚爽口眼大而圓、大者三四尺、在水中則勢強力健、間有漁人懷之者、必不使魚而識之、撫背腹而任魚所之、遂至岸畔而急拋于陸、若魚識人之抱、則跳動掉尾、人自顛倒、大抵釣無常餌、網而采之、有赤黃白三色、詳察之則明白矣、其味據所產之水而有好惡、

〔重修本草綱目啓蒙二十九鯉魚〕コヒ和名マゴヒ、一名稱龍、記環李長史名物法言

赤鱗公子六六魚錦鱗飛魚共同魚主細珠金尺李本上文鯉行厨

赤鱗同上

鯉ハ首ヨリ尾ニ至ルマテ、鱗ノ數三十六アリ、故ニ六六魚ノ名アリ、證類本草ニ、古語云、五尺之鯉與一寸之鯉大小雖殊、而鱗之數等是也、ト云ヘリ、○申鯉ノ生ジテ二年ナルモノヲ二年物ト云、木氏ノ説、頭ヨリ尾ニ至テ一尺七八寸アリ、又生ジテ三年ナル者ヲ三年物ト云、頭ヨリ尾ニ至テ二尺二三寸アリ、又一枚物ト云ハ、鯉ノ一枚鱗ニテ、兩手ノ指ヲ以圍ミテ、餘レル鱗數ヲ云、二箇餘ル